

論文

筑前
怡土 興福寺木造十一面觀音像について

——西戒壇運照と京大仏師照暁——

八尋 和泉

一 はじめに

興福寺と西戒壇 東明山興福寺は福岡県糸島市香力^{（一）}にある。背振山系の雷山山麓から北へ二キロメートルほどにあり、福岡市内からは西の姪浜^{めいのはま}で地下鉄が地上に出て、JRの筑前前原駅^{まへんげん}で下車すると、南に雷山に向かつて四キロメートルほどの所にある。近世のある時期、筑紫観世音寺戒壇院の隠居寺^{（二）}となっていたときは、西戒壇と本末関係にあった寺である。今は真言宗大本山大覚寺末寺である（写真17）。

西戒壇、すなわち筑紫観世音寺の戒壇院が、江戸時代元禄年間に、本寺観世音寺から黒田藩の裁決によつて離されたのは、律僧在寺の時、殊に本稿の運照律師在院の時代であった。戒壇院の観世音寺からの独立については、本稿の主題ではないが、手みじかに言えば次の通りである。

戒壇院の近世中興本願とされてもいる宗睦智玄和尚は、太宰府崇福寺関係の僧であったが、観世音寺側からいえば、いわば容認なきままに戒壇院に住した道心者であった。やがて本寺観世音寺と戒壇院側との確執が生じ、争論の末、筑前黒田藩主の裁定によつて戒壇院は博多禪寺四カ寺の管理に付された。その裁定の元禄十六年（一七〇三）六月の文書はよく知られていて、そのために、西戒壇のその後は禪宗寺

院のように見られているが、招聘に応じて入院した西戒壇院僧侶たちの宗旨は真言宗であり、戒壇院は真言律をもつて運営されていた。

宗派のちがいが根底にあり、それに支配関係が絡み、ほぼ十余代に亘つて続いた律僧たちは、ついに第十一世等空法忍和尚のときに、反目は頂点に達し、西戒壇から退院することとなった。その後、天台僧や真言僧の看坊の時代を経て、明治六年（一八七三）四月に博多聖福寺百二十八世の東瀛自閑和尚を戒壇中興一世として、戒壇院は名実ともに禪宗寺院となり、聖福寺の末寺として今日に及んでいる^{（三）}。

この戒壇院住僧の隠居寺であった興福寺に、享保二年（一七一七）、木造十一面觀音像が造立された（写真1）。運照律師が、戒壇院を退院して隠居寺興福寺に入寺した頃の発願造立である。

運照と照暁 運照律師が讃州即ち四国香川県の靈芝寺から、西戒壇に入院したのは元禄五年（一六九二）十一月であった。それから二十四年、四半世紀を西戒壇で過ごし、正徳五年（一七一五）に病身のため隠居を申請し、後住を湛明比丘に譲りたいと管理の禪寺にも要請^{（四）}、その後住弟子湛明律師によつて、享保二年（一七一七）四月に運照律師の興福寺への引越しが申請されている（東長寺戒壇院文書^{（五）}）。このとき既に隠居寺興福寺に移っていたと思われる運照律師は、本稿の木造十一面觀音像の願主となつて、宝篋印陀羅尼を書写させ、仏舍利も

籠めて、隠居先の香力の人々の結縁を募り、造立は戒壇院時代から昵懇の京仏師照暁に担当させた。宝篋印陀羅尼書写と頭内に仏舍利奉籠ということを考えると、一段と真剣な造像を思わせ、靈驗功德の長谷観音像としての造立は、運照律師の篤い願いがこめられていたのであろう。

本鉢は享保二年（一七一七）正月から二月のはじめまでの造立で、桐製の厨子には三月三日の墨書があり、三月に入ってすべてが成就したようである。運照律師は六十五歳、先述の通り数年前から病身であった。享保五年正月十日入寂まで二年、運照律師の意志には、重い森厳な願いが感じられる。

運照律師が戒壇院で造像に関与するのは、管見ながら、今までのところ、元禄九年五月の戒壇院本尊盧舍那仏坐像光背の制作が最も早い（写真16）。運照律師は観世音寺の仏像修理にも尽力し、元禄九年八月に、木造吉祥天立像の修理に「讃州日內山靈芝律寺僧慧燈運照苾芻」と記し「勸化沙門戒壇院住持五世運照慧燈」とも記している。このときの修理仏師は「筑前福岡住岩瀬又四郎」「源兵衛」と云うから佐田文蔵朝桜と萬通の兄弟である。「修復次第惣鉢取立かすかいしたじむぎ筋布させ御身ごふんこくそ御衣ためうるし金ノもん りん寶御おび金御くつくろぬり 台座新造うるし朱ぬり 運照記之置」とあり、運照が仏像修理の技術的な記述を行っていることは驚きである。恐らく造仏修理に対する知識を充分持ち合わせていた僧侶であったことが頷かれる。観世音寺兜跋毘沙門天像の元禄十年八月の修理でも、「福岡才工人長左エ門善慶」とあり、朝桜や萬通の父安通の事で、「勸化之苾芻戒壇院之住持中興之四世運照記之置也」と記している。観世音寺仏像修理において、福岡仏師佐田文蔵家の仏師等と親交もあったこ

とがうかがわれる。そして、運照律師が戒壇院中興四世とも五世とも名乗っていた事も分かる。

ところで、戒壇院の本尊後光新造に続いて元禄十二、三年には両脇侍の新作に進むのであるが、これも京仏師照暁に発注される。運照と京仏師照暁との出会いは、今のところ本尊光背新造が最初と云うことになるが、戒壇院梵鐘の笠形陰刻銘文によれば、讃州靈芝寺運照律師が要請に応じて入院したことを述べた後に、檀信道意居士が洛之仏工に命じて本尊の両脇に僧伽之相の文殊・弥勒両菩薩像を安置したことと語っている。文殊・弥勒両菩薩像の本願施主で、施財主でもある筑前国嘉麻郡白井村白井氏道意は白井村の里長、気雲道意居士と呼ばれ、元禄十三年四月、行年八十二歳という年令も、木造弥勒菩薩像台座内の墨書に見える。

運照律師が戒壇院に元禄五年十一月に入院して、西戒壇本尊光背の新造まで四年半を過ごしている。その間、観世音寺の四天王像を修理途中に、元禄八年に病没した「京佛工演說道心」や元禄九年七月に「大仏師井村好覚」等にも出会っていた運照であるが、京仏師照暁への発注は照暁の技量を充分見極めて信頼を持っていたからに違いない。運照律師入院前後の造像修理等に関与した資料が増加すれば、より一層明らかになる。ともあれ、京大仏師照暁は西戒壇本尊の光背制作、両脇侍の新補を契機に、その後、筑紫地方に関わりがづくのである。戒壇院運照律師発願の造像修理に西戒壇院を軸に関与することが多くなり、九州での足跡を幾分かたどることが出来るようになる。

本稿の論旨は、未紹介のままになっていた興福寺長谷観音像造立の墨書銘文をひもとくことからはじめ、運照律師と京大仏師照暁の足跡を遡ってたどることにしたい。そのことは京仏師の地方への長期にわ

たる関わりのなかで、人的関係や宗派関係にもとづく発注受注がいかなる展開をもたらすものか。そして、京仏師の受注と制作行動のなかに、照暁は京工房では木地のみの制作とするなどの造像プロセスが分かることは貴重な資料である。即ち、地方への搬送と現地での仕上げ、仏師の現地造像出向と現地での技術者雇傭などの様態等々、京仏師の地方に於ける造像事象を考える契機の一つになればと願っている。

二 興福寺の木造十一面観音立像

東明山興福寺 運照律師が願主となつて照暁に造立させた木造十一面観音立像を安置する興福寺について大略ふれておこう。

山号は東明山、所在は筑前怡土郡香力村字天神前。本尊は薬師如来坐像で、創立年は不詳。略縁起には中興開祖は洛西槇尾山上座知鏡恵海大律師とし、天和年間（一六八一～一六八四）再建、律師は初め千如寺の榮儀阿闍梨に随つて修学後、山城国槇尾山の僧房で修行し得戒して、遂に興福寺を復興、西京平等心王院西明寺の系譜に属していたという。明治、大正、昭和初年まで無住、昭和二十年（一九四五）六月十九日の博多空襲の時、糸島郡香力にも空爆、焼夷弾投下の爆撃をうけ、薬師本尊の首だけと日光・月光両脇侍を持つて避難、萱茸の本堂は焼失したという。戦後昭和二十五年秋に首だけ避難できた木造薬師如来坐像を再興、避難の脇侍、日光・月光両菩薩を再安置して木造薬師三尊像が復興された。本堂も庫裡も焼失して、多くの宝物什宝を失ったが、この木造十一面観音立像は弘法大師安置の大師堂に安置されていたために、厨子とともに焼失を免れたことを、まずは喜びたい。

当山は太宰府戒壇院の隠居寺となっていたことは先に述べた。境内

の裏側の丘の古墳時代の円墳上に、戒壇院世代の墓碑があり、中央に興福寺中興の恵海大律師の石塔が立てられ、周辺を囲むように運照、湛明、覺龍、覺天、法忍らの近世西戒壇院真言僧は興福寺の墓地に石碑が建てられていて（写真18）、興福寺本堂内には各和尚の位牌も安置されている。

「東妙山過去帳」（安政四年・一八五七巳八月）には宗睦智玄の名は見あたらない。智玄は禅僧であり、後に博多妙楽寺で首座を贈進され、おそらく同寺あるいは同寺関連寺院の鬼籍に入つたと思われる。覺城と慈燈両和尚は太宰府の戒壇院裏山の墓地に石碑がある。

「興福寺過去帳」には智玄をつぐ正洞永覺から記載がみられ、正洞和尚は興福寺の中興として「当寺中興」「戒壇中興」と肩書きされている。正洞の戒壇院入院は延宝七年（一六七九）四月二日、退院が貞享元年（一六八四）、興福寺が戒壇院の隠居寺として再興された時期も推察される。以後十一世の等空法忍和尚が天明三年（一七八三）に戒壇院を退去して、真言律での戒壇院経営は一応終息した。戒壇院管理の禅宗側は代わりの真言律僧を要請したが、真言宗東長寺や雷山千如寺の支配の中では、西戒壇律僧たちの旧状復帰は困難であった。天台律での運営をはさんで、雷山僧等の看坊の時代もあったが、近代に聖福寺の末寺となつて今日に及んでいる。なお、博多禅寺の戒壇院支配に於いて、最初は聖福、崇福、承天、妙楽の四刹の支配であったが、崇福寺と妙楽寺は大徳寺派で、重複を避けてか妙楽寺が離れて三刹支配となつていった（妙楽寺渡辺桂堂御住職談）。

貝原益軒編の『筑前國續風土記』戒壇院の項に割注で「律宗也」と言わせたり、「戒壇院は近年再興せしより、和泉國大鳥郡大鳥山神鳳寺に属せり。凡今天下律院の本寺は山州槇尾西明寺、河州丹南郡野中

村野中寺、神鳳寺、此三箇なり」と認識されているのは、事実とは異なるものの、実情を語っていることになろう。加藤一純等の『筑前國續風土記附録』は「ちかき頃より寺僧ハ和泉國大鳥郡大鳥山神鳳寺同派なり。本編に神鳳寺に属すとあれども、観世音寺の子院なれば、上代より本山なし。只住僧は神鳳寺同派なり」と訂正しているが、『筑前國續風土記附録』の編纂が始まった天明四年には、戒壇院では真言律僧は隠居寺に引揚げていて、管理の禅寺側からの天明四年十月に興福寺との末寺関係解消を告げる「離末證拠之事」の文書の写し（東長寺戒壇院文書）がのこっている。

戒壇院にのこされた冊子の中表紙に「天明四年甲辰三月十三日 戒壇院佛前諸道具并家具一切引渡帳 戒壇院知事」とあり、当時の戒壇院財産の一切を知りうる貴重な記録である。表紙が加えられて「戒壇院法忍弟子法瑞戒壇諸道具三箇院エ引渡之帳」とあり、引き継ぎに弟子法瑞が残務整理に知事として残っていたのであろう。

天明六年より肥後見性寺の太室和尚が入院、書画でも名高い天台僧豪潮が和尚を補佐して、寛政七年（一七九五）四月上旬から同九年の春まで在院していることは、あまり知られていない。

香力興福寺が山城国槇尾西明寺を本寺として再興されたが、翻って律寺との関係を見ると、戒壇中興の智玄禪師が延宝五年に退院後、禅宗四カ寺の管理がつづくが、聖福寺の万水和尚は和泉国大鳥山神鳳寺の快円和尚を招聘しようとしたが果たせず、奈良法隆寺の真政和尚の弟子正洞永寛が下向している。後に運照の弟子湛明元江が河南野中寺に修行に向かうなど、神鳳寺、西明寺、野中寺など当時隆盛の中にあった律寺との関係がしのばれる。

（二）木造十一面観音像

法量 興福寺の木造十一面観音立像は、近くの瀬戸村吏の寄付になる楠材を用いた像高一・一・五センチ、髪際高九二・〇センチの三尺像である。長方形の台形台座は高二〇・七センチ（細部法量は文末に掲載）、蓮花ではないところは和長谷観音像の縁起に語られる長方形（或いは方形）の台座宝盤石を意識したのものであろう。頭光の輪光背には繊細さと華麗さをみせる放射光をあしらっていて、光背高一・二四・〇センチ、光背台座を含めた総高は一四四・七センチである。これに当初からの厨子も伝えられていて、厨子の高さ一六六・〇センチ、厨子身部の幅は六六・〇センチで、奥行き四九・〇センチを測る。厨子左壁上部にも墨書があり、薄れているが「享保丁酉年（一七一七）三月三日」の日付がわかり、寄付者や化主運照の文字も読める。

彩色 彩色は胡粉を下地に或いは具墨下地も用いて、その上に華やかな色彩が重ねられていたようだが、ほとんど剥落して、肉身は楠の木肌をみせている。天衣や条帛、腰帯などに金泥が塗られ、金箔も押されきらびやかさを見せているが、金泥金箔は修理時のものである。

構造 像の構造については、楠材を用いながら割削を行って内削りするという、楠材では普通は見られない割削の手法を用いていることが注目される。頭部は挿首さしくびとしているが、一材を用いて左右の耳半ばを通る木目で前後に割って内削りを施している。体部も一材で彫出、正中線にそって割削を行っている。即ち軀部は喉もとから両足の間にそって割り離し、内削りも深めに施して、再び矧ぎ寄せている。それに両肩材を矧ぎつけ、水瓶を持つ左腕は肘と手首で矧ぎ、右腕は一材で彫出しているが、前腕と手首先との矧ぎ目は木口を斜めに削ぐよう

にして矧ぎつけている。

右手を下げて掌を外にして、親指を少し内側に曲げるのは、掌と親指で錫杖を支える仕草であろう。念珠を手首にかけ錫杖を立て持つ姿の長谷観音像であるが、今は錫杖も数珠も失われている。

頭上の頂上仏面は瀟洒な目鼻立ちで、本面の表情に似て、繊細な彫出を知らせている。髻下部に四面、地髪に六面がのこるが、当初の頭上面と思われるものは髻下に狗牙上出面二面と瞋怒面一面、地髪に瞋怒面一面が見られ、他の頭上面は繊細さに欠ける後補のものである。

地髪上には宝冠帯を廻して、髻・地髪とも髪筋は美しい刀痕の陰影をみせている。左肩から右脇に糸帛をまわし、両肩から天衣をかけ、腹部周りの折り返しを、前さがりの微妙なカーブを描いて着けた裾は、二段に折り返されている。腰を巡る帯は、裾の上に腰あたりで装飾的な結び目をみせて、足を開き気味に笥形方座に立つ姿である。

台座 裾でやや開く台形の方座は笥型につくり、前面に雲文を浮き彫りしている。蓮華座ではないのは、大和長谷観音像の台座宝盤石のいわれを踏襲したもので、長谷寺縁起絵巻や幾つかの絵画にも方形の宝盤石を台座に描くものがあり、方形台石には虹模様のような紫雲の文様が描かれているものをみる。

御衣木に楠材を寄付されての興福寺長谷観音像造立であったが、古来、九州では多用されてきた材質である。楠の霊木を用いた大和長谷観音像に因んで、台座も伝説の方座をあしらったということであろう。因みに、像高十メートル（三丈三尺六寸）を超える大和長谷観音は、天文七年（一五三八）運宗等の造立のものが現在の長谷観音である。天慶七年（九四四）以来七度の焼失にあっても復興され続けられたも

ので、現在像は直接には漆塗りの板を踏んでいるようであるが、伝説的な宝盤石については下部にあるのか、靈験譚として秘められた存在となっている。照暁は天文七年再興の長谷観音に参詣の機会があったとしても、伝説の自然石の宝盤石を視覚的に再現した先行例、例えば、岡田文化財団の長快作長谷式十一面観音像のような先行例に倣ったのであろう。長谷観音の絵画では長谷寺縁起絵巻や掛幅のものに紫雲文をあしらった方形の大盤石を足下に踏む長谷観音がみられるものがあり、長谷観音の絵画に台座を確かめ、彫刻の先行例に倣ったという可能性は高い。

興福寺像の笥形台形台座は楠材が主体であるが、なぜか天板と背部材が杉材となっていて、杉板二枚は銘記の筆態が同じで、他の三面の側板内の墨書銘文の筆態とは異なる。杉材二枚は後補とも考えられ、杉板と取り替え後に、以前の楠材の墨書銘記が書き写されたものかとも考えられる。

（二）造立銘文について

銘文は大きく五種に分けられる。同時期記銘であるが銘文箇所から①体内の墨書銘文、②体内奉籠の木札墨書と包み表書き、③台座内の墨書銘文、④光背の台座への差し柄墨書、⑤厨子外側の墨書銘文の順にたどりながらコメントを添えることにしよう。

①体内墨書銘文

まず、本鉢頭部内墨書から見ていこう。

〔興福寺木造十一面観音立像 墨書銘文〕

【頭部内銘文】（写真2）

〔後部頭内墨書〕

筑前州怡土郡

香力村天子神本地十一面

観音并堂廻立

京佛工大宮六角下ル

正慶本願化主

興福寺

運照比丘

〔後頭部内頭頂墨書〕

享保二年丁酉

正月成就

〔面部及首部内墨書〕

十一 面 観 音（この行は頭頂に亘って墨書）

筑前州怡土郡香力村天子神本地

十一面観音廻造京大佛工

正慶本願主興福寺

運照比丘

享保二丁酉

正月廿一日

後頭部内及び面部と首の内側に書かれた内容は、香力村の字が天神、これを「天子神」としたのは天満天神を天命を受けた神とたたえ、その本地である十一面観音像の造立を謳っているであろう。そして観音堂も建立したことを述べていて、厨子入りの十一面観音像が観音堂に安置されたことを知らせている。仏師は京都の大宮通六角下ル住の「正慶」と名乗る。「しようぎよう」と読ませるのであろう、その後には「照暁」と記されることが多い。しかしながら後述の納入木札に「正

圭」とあり、いまのところこの一件だけであるが「しようけい」「せいけい」の読み名も併用したのであろう。

本願化主は運照比丘であり興福寺在住を示している。運照律師が西戒壇を退院したのは正徳五年（一七一五）であり、元禄五年（一六九二）十一月から足かけ二十四年にわたる。第九世（東長寺戒壇院文書では十世）慈燈覚邦も二十四年で、四王寺山麓の戒壇院墓地に墓碑があり、近世律僧ではこの二人が最長の西戒壇住持を務めている。

頭部内の墨書は以上であるが、後頭内に紙包が納入され、上部に「上」と墨書され、竹釘三本で固定されて奉籠されていた。今日まで未開封である。この包みの中には台座内に記された「舍利 壹粒」が奉籠されているという。

体内には墨書はないが、巻紙二巻に木札を添えて紙縫こより数本で結び、体内に奉籠されていた（写真9）。紙縫は外れて木札は巻紙に圧着していたがすぐに離脱、頭部内の包み同様、巻紙も今日まで未開巻である。

木札は厚さ八ミリほどの杉材で、縦二・五センチ、上部幅二・四センチ 下部幅二・九センチ 四隅を落とし上部中央の上から一・五センチのところキリ孔を穿っている。体内壁面に打ち付けるつもりであったのかもしれない。木札の墨書は次の通りである。

②体内奉籠の木札墨書と包み表書き

〔体内納入 木札墨書〕（写真3）

（表）筑前州怡土郡香力村天子神本地十一面観音

立像三尺廻建立東明山興福寺現住

運照比丘檀主村中信士女佛工京大宮六

（左木口）角下ル西ガワ正圭享保二丁酉年正月十一日

（裏）香力山興福寺ニテ作之也為現當二世因

縁施主圖名書付本尊胎中ニ納之置也

宝篋印陀羅尼并心經等本尊御頭ノ中ニ

（右木口）納之也本尊ノ御衣木瀬戸村ノ吏古川利兵衛寄附

この木札で三尺像の造立であることを述べ、本願運照は檀主の村中信士女の結縁を称揚するかのようである。佛工は京大宮六角下ル西側と詳しく述べ、「正圭」と書いて「正慶」その人であろう。

大仏師照暁が享保二年（一七一七）の正月十一日、現地隠居自坊、香力興福寺での造立を始めたことを明示している。現當二世因縁のため胎中奉籠の巻紙には施主姓名を書き付けたとあり、村中信士女の名が書き付けられ、頭内の包紙には「宝篋印陀羅尼」や「般若心經」が書写されて包まれていることが語られている。奉籠の紙包みと巻紙は紙質の劣化も激しく、香力村民にとっては先祖の結縁の証であり、村民信仰史の貴重な資料でもある。いずれ劣化に対する充分な配慮のもとで、開封の時もあるが、劣化の紙質を心得た表具師にその旨を告げて開封と裏打ちを依頼すべきであろう。

本尊の御衣木は瀬戸村の吏、古川利兵衛が寄付したことが記されているが、御衣木に関しては台座にも語られている。

③台座内の墨書銘文

台座は側板四面と天上板との五面で構成、尊像足下の足柄を切りあけた天板と背部側面板が杉材で、裏面の墨書も同筆、あと三面は楠材で左右側板の裏墨書は同筆、台座前面裏墨書は前二者と異筆で、三種の筆体が見られる。

〔台形台座 内面墨書銘文〕

（左側 楠材）（写真4）

筑前州怡土郡香力村

天子神本地十一面観

音御長三尺和州初

瀬寺観音写綴造

享保二丁酉年

正月十一日事始

佛工京大宮六角下ル

照慶

ここでは十一面観音像は三尺像で、奈良の長谷観音を写したものだといひ、享保十一年正月十一日に造立にとりかかった。斧始おのはじめの儀式なども行ったのであろうか。仏師の居住を記し、ここでは「照慶」と墨書している。

（右側 楠材）（写真6）

寶篋印陀羅尼 二卷

阿弥陀根本陀羅尼 壹卷

如意輪大呪 同

般若心經 同

舍利 壹粒

上讃州之僧智燈書写焉

本尊御首納

檀主香力村中信男女

圖名書付本尊胎中納

智

宝篋印陀羅尼二卷、阿弥陀根本陀羅尼、如意輪大呪、般若心經各一

卷等を讃州の僧智燈が書写して、観音の頭部に納め、舍利一粒の奉籠も記述されている。そして香力村の信男女の名が書かれた巻紙が木札とともに胎中に納められたという。最後の行は墨痕が剥離して読めない。

(前面内側 楠材) (写真5)

一 観音御衣木瀬戸

村吏利兵衛山ノ楠木ヲ以て

寄附之

一 観音ノ座同長谷寺ノ

写御光輪光八葉

卅三本筋ヲ付

一 厨子福岡若松屋^{名鶴町}

与三兵衛室寄進

瀬戸村吏、利兵衛が楠材を寄付したことは、体内木札にも述べられていた。観音の台座は大和長谷寺の写しというが、現在の大和長谷観音は天文七年(一五三八)運宗等の作で、伝承の大盤石の方座は直接には見えない。京仏師照暁は長谷観音参りの経験はあったと思われるが、すでに長方形の台座に立つ長谷観音像の絵画や仏像例があつて、その台座を倣つたのであろうことは先に述べた。

台座は天板と背面板が杉材であり、銘記の墨痕も杉板二枚は同筆で、修理取替え後に銘記転写の疑念無しとしない。

(台座天板 杉材 天板には足柄切込み孔、光背柄切込み孔あり)

(写真7)

京大宮

六角下

大佛工

照慶

本願化主

比丘運照律師

(以上は木目に沿つて書き、以下は木目にクロスして墨書)

香力村

吏大原氏

三郎左衛門代

(背部側板 杉材) (写真8)

享保二丁

酉歳二月

三日讃州

日内山之住

智燈記之

④ 光背の台座への差柄部表裏に墨書

[光背柄墨書]

(表) 「上棟」

(裏) 「享保二丁酉

二月五日」

⑤ 厨子左側板外側の墨書銘文

[興福寺十一面観音厨子 側板墨書銘文]

十一面観音厨子

福岡名嶋町竺与三兵衛

室建立享保丁酉年

三月三日

化主興福寺比丘運照

如意吉祥々々 菩提記之

光背は大和長谷観音の舟形光背には蓮華文を浮彫りしながら、蓮台上の円相に梵字キヤが浮彫りされているが、興福寺像は頭光中央に八葉蓮弁二段の蓮華を据え、放射状の光輪光を十一方に三本ずつのぼし、背後左右は長めの放射光をあしらって、繊細華麗な光背を作り上げている。放射光三十三本は三十三観音変化の謂われになぞらえたものである。光背は大和長谷観音には倣わず、華麗な放射光の光背を採用しているが、これも長谷寺式十一面観音の画像に例があり、兵庫・金心寺本に見られ、台座は蓮華座である。そして、厨子は福岡名嶋町若松屋与三兵衛の妻が寄進者となっている。

興福寺十一面観音立像の造立は、享保二年の正月十一日から始め、像本軀は正月中に成就し、二月の三日過ぎには台座が出来上がり、二月五日には光背が組み上げられた。それから厨子の制作にかかり、三月三日には厨子も出来上がって、厨子の側板に墨書銘文が施されたということになる。

三 仏師照暁の作歴と運照律師

～筑前を中心～

運照のこと 興福寺の十一面観音像（長谷観音像）を造立した京仏師照暁は、少なくとも筑前においては、その殆どが筑紫観世音寺の戒壇院運照律師が化主となった仏像の造立や修理に関与しているということである。

運照律師は戒壇院住職となっても、出身地の四国香川県志度市靈芝寺を活動の拠点のひとつとしていたようであるが（このことは香川県

立ミュージアムの御厨義道氏に多くの資料とご教示をいただいた）、そのため郷土の宗教人として、あたかも讃州在住扱いされているように受け取られる。本稿で確認したように、運照は仏師照暁の造像修理の下命者であり、その全貌の把握は今後の課題である。運照の宗教活動全般を明らかにすることも肝要であるが、今は京仏師照暁の造像修理関与の範囲において運照和尚の役割を把握して、今後、両者の関係性を確かめたいと思っている。

九州での活動拠点は西戒壇に元禄五年（一六九二）十一月に入院してから、二十四年、隠居寺の香力興福寺に移ったのは晩年で、病気がちであった。享保三年（一七一八）六月に照暁が香川県志度市の与田寺金剛力士像を修覆したときは、流石に運照律師の名はない。香川県立ミュージアムの御厨義道氏に多くをご教示頂いたなかに『志度町人物風景』の「運照上人」の項がある。そこには宝永六年（一七〇九）が生年五十七歳と判るものがあるというのを起点にすると、承応二年（一六五三）の生まれで、興福寺の位牌や墓碑に享保五年正月十日寂とあって、六十八歳での入寂がわかる。

運照上人は日内山靈芝寺の中興の祖、恵忍泰生和尚の弟子で二十六歳の時に得度、後に運照庵を開基して熱心な布教活動を行っていたと伝えられている。

運照律師は西戒壇院に入院後、出身の讃州靈芝寺との関係をどの程度継続し、運照庵を拠点にするほど讃岐との関係が続けた意図は何であったのだろうか。布教活動や寺院経営の個人的な力量に関係することでもあろうが、西戒壇の禅宗管理のなかでは不安定さを感じていたものか、讃州へはいずれ帰るべきと自認していたのかもしれない。

京仏師照暁の造像修理と運照 末尾に掲げた京仏師照暁の造像修理年表

をたどりながら、運照律師が本願や化主となって造像修理が行われた状況を追ってみたい。そのなかで、運照と照暁の関係に注意しながら、受注寺院の所在や宗派にも目配りしながら、造像様態の概要が把握できれば幸いである。

今、分かっている運照と照暁の最初の事業は、戒壇院本尊の光背の新作である。元禄九年（一六九六）五月、運照の戒壇院入院から三年半を過ぎたところである。西戒壇本尊は「盧舎那仏」と今は呼んでいるが、このころは戒壇本尊は「釈迦如来」とも呼ばれ、両手を胸前にあげた説法印の釈迦という認識もあつたことが分かる。元禄十四年の戒壇院梵鐘の笠形いっばいに陰刻された「観世音寺戒壇院紀」には「盧舎那佛」とも記されている。

この西戒壇本尊の台座と光背の新造が、今のところ京仏師照暁の西戒壇院デビューということになる。銘記中で興味があるのは「御光木地」ということである。素木の段階で筑前に送り込み、「漆塗師」は福岡城下の塗師「市右衛門 治右衛門」が担当、おそらく京都蛸葉師工房で、光背の木地を仕上げ、分解して戒壇院へ搬送し、戒壇院で組み立てて漆塗り、金箔置きという工程をたどったのであろう。光背にも台座にも仏師照暁は「木地佛師」と記されている。中世までの造仏記述に、このような術語は寡聞にして記憶にないが、遠隔地からの受注にあたって、地方搬送後の塗師や箔置師が準備されていれば、合理的な分業形態といえる。光背の向かって左端裏に「御光 元禄九年丙子七月戒壇院運照建立 二日市村大賀氏次兵衛 鳥妙印信女菩提金六両喜捨 金薄并塗料」と朱漆銘があつて、本尊の文殊・弥勒両協侍のところで後述する福岡城下の塗師や福岡仏師佐田文蔵らの協力で、漆塗りや金箔置きが行われたようである。このような形態は全国通用

なことであろうと思われ、あるいは中世以前にも地方からの造仏発注に、このような形態に似た事例があつたのではないかと思われる。

光背には照暁は「京大宮通タコ葉師上丁 佛師五兵衛」と、俗名で記しているが、三年半後の戒壇院両協侍には仏師五兵衛のあとに法名照暁とあり同一人であることが判る。⁽¹⁶⁾

この両尊の造立に関して、運照律師は近郊の結縁者募縁に奔走したと思われ、東長寺戒壇院文書中の「西戒壇諸法器世具等記録」を見ると、堂塔造仏を中心に仏画や聖教類、什宝什器類の整備に努め布教事業に篤い情熱を傾ける宗教者であつたことが分かる。

元禄十一年四月、福岡県北九州市永源寺の平安仏木造聖観音立像を修理している。永源寺は長崎街道に属する筑前六宿の木屋瀬にある。再興本願は福岡城下簀子町、商人天王寺屋浦了夢であり、了夢は貞享元年（一六八四）に戒壇院に石造五重塔を寄進、戒壇院中興正洞永覚律師は意気に感じて、累年奉持の鑑真将来の仏舍利を塔身に奉籠した。⁽¹⁷⁾ 戒壇院とは深い関わりの商人浦了夢と戒壇院運照と京仏師五兵衛照暁との関係を結ぶ糸は明確である。

さて、戒壇院に本尊協侍の文殊と弥勒の両菩薩立像を造立するときが来る（写真11、12）。元禄十二年十月の京都での「木地」造立、それから搬送して、元禄十三年四月八日までには成就している。文殊菩薩は経巻を弥勒菩薩は宝塔を、本尊の外側の手を胸前に差し出して持し、両尊とも下げた本尊側の手に如意を持している。「山門堂社記」の観山戒壇院の記事（天長五年・八二八）に金色釈迦牟尼仏を中心に比丘形と文殊・弥勒菩薩像の安置が知られるが、延暦寺戒壇院像は『観普賢經』中の授戒作法に基づく造像であり、戒壇院本尊は釈迦如来像として認識され、授戒の三尊像として造立されたのである。文殊と弥

勒の両菩薩像は比丘形であるため地誌類に阿難像・迦葉像と間違われたこともある。

両像造立には仏師照暁は「京佛工五兵衛 法名照暁」と俗名と法名が記される。元禄十二年十月に「木地本尊於京師奉造佛工照暁」とあり木地は京都で制作したことを明かしている。続けて戒壇院に於いて莊嚴しょうげんというのは、即ち漆塗り以降の作業を意味している。漆塗りは福岡城下職人町の塗師「弥兵衛 十右衛門」、金箔置師として登場するのが福岡住の長左衛門と又四郎・源兵衛の父子である。江戸時代筑前一带の仏像の造立修理に携わる佐田文蔵系譜中の、やや早期の仏師たちで、父は安部長左衛門安通、兄の又四郎は朝桜、弟の源兵衛は萬通といった。この兄弟の頃からは佐田文蔵を主に名乗るが、父の時代以前は阿部、尾越、今泉とも云った。¹⁹⁾

以上のような職人町の塗師や佐田文蔵等の地方仏師に協力を要請するのは、おそらく寺院側が仲介するのであろうが、京仏師と筑前地方工人との連携が明確な貴重な事例といえる。

この文殊・弥勒両菩薩の施財主は嘉麻郡臼井村里長、気雲道意居士と記されている。臼井氏道意は行年八十二歳、観世音寺とも関係深い土地柄であることも、戒壇院との関係の底流にあることは明らかである。両脇侍の完成は元禄十三年四月八日、仏誕生の灌仏会の日に合わせたのであろう。

戒壇院にのこされた記録の中に「戒壇釋迦如来弥勒文殊脇士造立化縁之帳 元禄十三庚辰歳 四月八日成就 化主 水城村 花田氏次郎 右衛門 岡山氏久次郎」の表紙書きがある和綴の一冊がある。造仏喜捨化縁の三三七人の名が数えられる。大半は水城村の人たちであるが、近傍の坂本、上大利、瓦田の人々、そして福岡・博多の人々の篤い関

わりも知られる。末尾に「文殊弥勒奉造佛師京大宮通六角下ル丁 照暁」「本願檀主 嘉麻郡臼井村里長道意註」そして、戒壇院僧十一人、末尾に「戒壇現住運照慧燈性實記置」とあり、「恵燈」の方印と簡素な独特の横長四角の花押がみられ、年紀は「元禄十三庚辰歳四月八日」、両脇侍成就の日である。

元禄十四年に大阪府羽曳野市野中寺の木造慈門信光像の制作をはじめ像主没後の宝永四年（一七〇七）に完成とのこと等、関西大学の長谷洋一教授から近世仏師に関して多くのご教示をいただき、銘文資料とともに、野中寺が近世戒律復興と大きくかわる寺院であることも御助言いただいた。九州以外の照暁足跡の大方の御教示を願って表に組み込んだ。

次の福岡県嘉穂郡大悲庵の厨子入り延命地藏尊は、台座と光背を修理、厨子を新調してその厨子に陰刻された銘文があり、事情が知られる。運照と照暁の造像修理に関して筑前国嘉麻郡の寺院などが目立つのは、先述の文殊・弥勒の両菩薩の施財主臼井氏道意の存在もあろう。道意は嘉麻郡臼井村里長であり、観世音寺との関係の深い土地柄で、地域の仲介者となる機会は多いと思われる。

元禄十五年には平安時代の地藏菩薩坐像を修理している。今は博多聖福寺に所蔵されているが、体内銘に筑前国怡土郡一貴山の伽藍旧跡古寺のものであるという。照暁の修理時に一貴山と聖福寺のどちらにあったかは分からないが、一貴山は興福寺のある香力の西、二丈町にあり、夷魏いゑい寺跡の古寺伽藍を指しているのであろう。隠居寺興福寺から遠くはない。あるいは戒壇院を管理する禅寺である聖福寺に移されていたものを修理したとも考えられる。

元禄十五、六年に香川県に運照律師が仏像を寄付したり開眼供養し

たりしているが、簡略な記述であり、照暁が関わっているかどうかは不明で、運照律師も讃州に出向いたかどうかとも分らない。詳細な銘記の確認を願って表に組み込んだ。

元禄十六年には福岡県鞍手郡の円宗寺十一面観音立像の修理をしているが、これも関係は臼井道意居士周辺の幹旋等が想像される。この十一面観音像は円宗寺裏、白山の麓の普門寺という寺の本尊であった。天正年中（一五七三〜九二）に火災に遭い、本尊を円宗寺に移したと云われている。円宗寺能登原賢史^ご住職に『大読山報』（円宗寺寺報平成十五年 一八九号）とともに体内納入木札の写真資料のコピーでご教示いただいた。

戒壇院には相応しい鑑真像の造立が宝永二年に行われる（写真15）。牀座後屏中央に立てた背板の裏に陰刻銘があり、檀主福岡萬町の松村宅兵衛夫婦や息子、博多橋口町の西嶋氏、福岡簗子町の青柳氏などの陰刻名に列して、戒壇現住運照と京六角大宮住照暁が刻名されている。鑑真和上像の絵画は多く流布しているが、模刻彫像は少ない。照暁が唐招提寺の鑑真像を拝する機会があったかどうかは分からないが、戒壇院像は礼盤座に上げ畳を敷き、鑑真像の背部には、衝立の左右に袖をだして三曲衝立状に後屏が設えられている。鑑真像の絵画によく見るもので鑑真の肖像画を参考にしたのであろう。西戒壇院鑑真彫像は宝永二年の造立で、重要文化財になっている奈良東大寺の享保十八年（一七三三）作の木造鑑真和上像より四半世紀も古い。

太宰府や近郊の仏像修理も滞在時に依頼されたのであろう。太宰府市の隣、筑紫野市の山家の日輪寺地藏堂本尊が、今は山家の山田家に移されているが、宝永二年六月に仏師照暁によって修理された。化主は運照律師である。

天満宮傍の光明禅寺、方丈本尊の釈迦如来坐像を宝永二年七月に修覆、九月には同寺の阿弥陀如来坐像も修覆している。太宰府市内の天満宮のそば、と言うより境内と言えるが、臨濟禅の博多承天寺支配下にあった東福寺派の寺院である。天満宮から云えば渡唐天神を祭祀している境内の一堂でもあった。

宝永三年二月には、太宰府天満宮安楽寺の本地本尊十一面観音坐像と不動明王立像、毘沙門天立像を修理している。本尊十一面観音坐像は銘文に「古作面修複」の文字があり、古い頭部を修複して体部を新作したのであろう（写真14）。頭部と体部の大きさのバランスに少し難点があり、不動尊は藤原時代、毘沙門天は中世末まで遡るかと思われる。十一面観音坐像の光背裏に刻銘があり、「天源山安楽寺天満宮本地本尊十一面大士^井二脇侍不動毗沙門修複」「本願天満宮宮司檢校傳法大師大阿闍梨法印快鳳大徳」とある。末尾に仏師と化主が照暁と運照であることを書したのは戒壇院の行宗、陰刻した恵照も戒壇院僧と思われる、恵照は戒壇院本尊脇侍弥勒像台座内に見える恵性であろうか。

この十一面観音と「不動毗沙門」の三尊は、今は佐賀県の基山町の大興善寺に安置されているが、明治維新の神仏分離令によって、天満宮安楽寺境内から出されたものである。

宝永四年には運照律師は讃州天神庵で観音に入魂、現地に赴いたのであろうか、照暁も野中寺の慈門信光像の仕上げと引渡しで、少なくとも筑前にはいなかったと云うことになろう。

天満宮薬師堂の本尊薬師如来坐像の薬壺を宝永四年十月八日に制作している。初行に「修複」らしい文字が読めるが、薬壺の胴に陰刻銘文を刻んでいるところを見れば、修複とは本鉢の修覆が考えられる。

この薬師像も明治二年（一八六九）に太宰府威徳寺（現光明禪寺）の月潤和尚が、寺外に出されるのを惜しんで、官許も得て勧請したという。

宝永五年三月には、筑前から少し離れて、大分県宇佐市安心院町神徳寺の普賢延命菩薩像を修覆している。光背を新調したのか光背裏の陰刻銘に「妻垣八幡宮御本地普賢延命菩薩像」といい、日輪地藏尊と不動尊が脇侍であることも分かる。銘文末尾に宝永五年三月、京大佛工照暁と銘記されているが、運照律師の名はなく、運照の仲介から離れての別ルートの受注であったと考えられる。全国に散在する照暁工房造像修理作品の数と分布の把握については、近世京仏師の受注と地方への搬送安置の一樣態を認識する作業となろう。

宝永六年、太宰府政庁の西方、坂本村の観音堂にあったという室町期の大日如来坐像を修覆している。大日如来像底部の墨書は読みづらいが、本牀は恐らく宝永六年末に修理、新調と思われる光背の裏には「施主坂本村武藤九良次、化主運照、宝永七庚寅正月六日、京佛工照暁」の銘が彫り込まれている。大日如来像は今武藤家に安置されている。

正徳二年（一七一一）八月には、大応国師を開山とする臨濟禪の寺院である福岡市西区姪浜の興徳寺、その本尊の光背と台座を新調している。仏師照暁、化主戒壇院運照大比丘と当寺六十八世徳翁宗達が記している。戒壇院管理の禪寺の一角、崇福寺の関係であろうし、その場所も戒壇院末寺の興福寺への途中にある寺院でもある。

本稿前半の主題である興福寺十一面観音像造立に取りかかる前年、天満宮の飛梅の古木から彫出した天神像を、照暁は戒壇院で制作している。台座底の銘文に、享保元年七月二十五日、「化主興福運照記」とあり、興福寺に隠居した運照が記している。

台座底の銘記をたどれば、天神神前の飛梅木を御衣木に、一尺一寸の天満天神像一軀造立、太宰府（このころ）通古賀村之吏陶山氏安右衛門二十六才が願主であろう。照暁は「正慶」と書き、戒壇院で制作したことを銘記している（写真13）。

この像の願末が下部台座の底に記されている。それによると、この神像は京都大仏師正慶が飛梅の木を以って戒壇院で制作したものである。もとは御笠郡通古賀村にあったが、享保十四年秋七月に協議して、この神像を那珂郡庄村に遷し奉って、敬つて之を奉り併せて村中の産神とした。と同年十一月十五日、田中源右衛門久道、吉田治八成親、吉田六右衛門勝道の三人連名で記している。

後に水鏡天満宮が現在地（旧福岡県庁前、現アクロス前）に移されてからは町名である天神町の起源となり今日に及んでいる。

飛梅木を御衣木にして天神像を戒壇院で制作した照暁は、その半年後、享保二年正月十一日から十一面観音立像を香力興福寺で作り始めたことは本稿の前半で詳しく体内納入の木札銘等をもとに紹介した。二月二十一日に頭部が出来たようで頭内墨書が銘記され、その間写経等も行われたのであろう。讃州日內山靈芝寺の智照と云う僧が運照のもとに来ていたようで、台座内墨書の二月三日の日付が造立の進行を語る。台座が組み上げられ、二月五日華麗な放射光の光背が台座に立てられ、その前に本尊が立つ。厨子はそれから約一ヶ月ほど、三月三日に銘記され、厨子入りの十一面観音立像が観音堂に安置されたのであろう。

照暁の九州での足跡は、今のところ興福寺長谷観音造立で終わる。その翌年、享保三年六月、照暁の故郷讃州、香川県志度市大内町の与田寺の金剛力士像を再興している。病気がちの運照は動けなかった

のであろう、勿論運照律師の名はない。讃州与田寺での金剛力士像再興から約一年半後の享保五年正月十日に運照律師は入寂するのである。正月を迎えて、六十八才になったばかりであった。

本稿脱稿後に香川県立ミュージアムの三好賢子女史から緊急にまとめられた『六萬寺 木造羅漢像 調査概要報告書』が届いた。同ミュージアムの御厨義道氏から照暁作の新出資料があり、後日担当者からお知らせすることであった。急遽、年表に組み込ませて頂いたが、律僧たちの戒壇院退去に什宝などを受継いだ天明四年（一七六四）三月の「戒壇院佛前諸道具并家具一切引渡帳」「山門」の項に、「一本 尊木像 壹軀 左右阿難迦葉 一十六羅漢木像 一 祠堂位牌 山門ノ下 一 賓頭盧尊者 壹軀 一 石佛地藏 一軀」とあり、天明四年までは南樓門とも呼ばれる山門に安置されていた。山門は今ほ虚しく礎石のみとなっているが、天明八年の東長寺戒壇院文書に「一 三門 大破之所再興之檀主有之候事」とあって、天明年間後半に大破しているようである。頭のない賓頭盧尊者像の大破損が倒壊を物語っているのかもしれない。山門の倒壊は釈迦三尊や十六羅漢像が破壊、運照の戒壇経営に援助を惜しまなかった讃州の信者たちのことを思えば、讃州寄進者に知らされたのではないかとも思われ、今後の調査に待たれる。想像をたくましくすれば、三尊と十六羅漢像は讃州支援で京都で文政七年（一八二四）に修理され、成就するとそのまま讃州に運ばれ、後に三尊と十六羅漢像から羅漢像が二分され、羅漢像八軀が六萬寺に入ったのではないかと思われ、三尊とあとの八軀も讃州にあるような気がしてならない。

註

- (1) 興福寺は平成二十一年まで前原市に属していたが、前原市は平成二十二年一月元旦から二丈町、志摩町と合併して、新しく糸島市となった。怡土郡と志摩郡西部が、福岡県西端の市として発足。
- (2) 興福寺が戒壇院の末寺となったのは明確ではないが、興福寺側が興福寺中興を永覺律師としている。正洞永覺律師は戒壇院で入寂。後末寺関係解消は等空法忍和尚の戒壇院退院の年、天明三年（一七八三）に管理の禅寺側から「離末證拠」文が出されている。
- (3) 近世西戒壇については、東長寺戒壇院文書を駆使しての論考として次のものがある。
大賀郁夫「近世における戒壇院支配について」『筑前太宰府 戒壇院』（九州の寺社シリーズ 13）九州歴史資料館編・発行 平成六年三月
- (4) 運照は禅僧智玄を初代に立てていたので五世になるが、西戒壇の近世再興住持として、本尊光背墨書によると、五世と自認していた。後に東長寺戒壇院文書では四世に置かれ、戒壇院位牌では戒壇中興を正洞永覺とし、その遺弟亮雄本寂を外して運照は三世とされた。
- (5) 運照律師が病身であることは、東長寺戒壇院文書の正徳五年（一七一五）十一月十七日付けで「拙僧病身のため隠居、後住に湛明比丘」をと願い出ている。
- (6) 「東長寺文書」『福岡市文化財調査目録 5 東長寺収蔵品目録』福岡市教育委員会編・発行 平成五年三月。〈戒壇院〉の項目では史料番号一六七〇から一八六まで一九一史料があげられている。東長寺は福岡市博多区にある真言宗寺院で約三百通の戒壇院文書がのこされていたが、年紀のあるもの二五通、月日のものなど八四通ほどである。これによって戒壇院の近世律宗運営時代がよく分かるようになった。
- (7) 運照和尚の年令に関しては、興福寺の過去帳では判らないが、平田弘泰編集『志度町人物風景』志度町文化財保護協会発行 平成十四年三月「運照上人」の項（岡村信男氏執筆担当）に「昭和五十三年二月、津村宗林堂墓地から出土した石の刻文に、宝永六年、生年五十七歳とあるので、云々」を起点に算出した。

- (8) 戒壇院本尊光背裏の銘文には「宗睦智元禪人博多妙樂寺逝去」とあり、本尊釈迦像（毘盧舍那仏）の再興を智玄の功績とし、「二世中興正洞永寛、三世知淵寛港、四世亮雄本寂、運照記之」と記して、自らは五世と自認していた。
- (9) 九州歴史資料館編・発行『筑前太宰府 戒壇院』《九州の寺社シリーズ 13》平成六年三月「銘文等資料」に銘文は全文掲載。
- 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史』資料編 太宰府市発行 平成十年五月にも掲載。
- (10) 東長寺文書一七六五―一
- (11) 運照の弟子湛明は大坂の野中寺に修行に向かったことが位牌の裏に陰刻されている。
「湛明元江師」位牌裏面の湛明伝
律師字湛明者産秋月之吉井姓二八之年脱白于日照院及弱冠依止戒壇院師事運照和上依師命進具于河南野中律寺南山天台之學尤秀于世年三十有八而移戒壇院維持十一年于茲而后隱居怡土郡興福寺終年耳順終焉皈于安養實享保十二丁未年九月二十八日也小比丘篤雄欽誌之
- (12) 伊東史郎編著『調査報告 長快作長谷寺式十一面観音像』財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム発行 平成二十年十月四日（撮影 山崎兼慈）
- (13) 香川県教育委員会編・発行『与田寺調査』（平成七年 歴史博物館整備に伴う資料調査概報）平成九年三月に雲文の方形台座に立つ十一面観音の絵画が見られる。絹本着色 掛幅装（五七・五×二六・六センチ）ただし、光背は大和長谷観音の舟形光背で光縁部に十一面観音の種子キヤが円相中に十一個みられる。
長谷寺にも室町時代の長谷寺十一面観音像の絵画作例が二点ほど遺っている
方形の台座が描かれている。内田啓一「長谷寺式十一面観音菩薩画像」『佛教藝術』二九四号 佛教藝術學會編 毎日新聞社発行 平成十九年九月
大和長谷寺の巨大観音画像は寛文五年（一六六五）秀海上人代に描かれたものであるが雲文の宝盤石に立つ。
- (14) 前掲註（13）内田論文
- (15) 西戒壇本尊については、古来、安置の主尊についてあまり論じられたことがないが、現在の本尊がいつから安置されていたかも分からない。底板があつて体内の状況も知られず、座高が高い割りに膝の出が少ないなどの、構造をはじめ後補部分についても明確でなく、時代判定についても課題を残しているといえる。
- (16) 光背頭光八葉裏面にある銘文は今は見えないので、美術院の修理記録によった。
- (17) 太宰府戒壇院の石造五重塔の身部に「佛舍利 乙粒」の表書きの包みに舍利一粒が納められていた。故大西真応和尚が石造五重塔の積み直しをされた際に発見され、しばらく九州歴史資料館で預かっていた。現戒壇院柏木文正老師に戒壇院で読経供養の上開封して頂き、中央に斑点を有する舍利は招提舍利に似ると聞き、唐招提寺に持参して頂き確認を願ったが、別種であろうとの鑑定であつたと聞く。なお、石造五重塔塔身納入の仏舍利には、次の文書が添えられていた。
今所納佛舍利當院開山祖師唐鑑真過海大師將來之佛舍利也乃當院中興正洞永覚律師累年奉持焉貞享元乙丑年浦氏單傳了無居士建立此五重塔婆于時洞律師感彼檀信鎮納此舍利一粒永為律法鎮護矣享保十二年當院第六世現住比丘覺龍篤雄修補之其後延享五戊辰年當院第十世慈等観音堂脩覆之砌亦々加修覆謹記斯舍利塔之顛末以傳後世後生亦加脩覆幸甚々々
延享五戊辰年 四月廿二日 現住比丘慈等謹書
- (18) 堺市博物館編・発行『仏を刻む―近世の祈りと造形―』平成九年四月二十六日大阪・光明院釈迦三尊像（延宝五年・一六七七）解説を参照。
- (19) 佐田文蔵系譜は福岡東名島町に住し、十七世紀の後半から近代に至るまで造像修理に従事していた。福岡東名島町を根拠に活躍したので、筆者は佐田文蔵系譜を「福岡仏師」と呼び、中世末に北部九州で活躍する博多に居住の仏師猪熊氏系譜を「博多仏師」と呼んでいる。拙稿「博多仏師と福岡仏師」『宗教文化』十三号 宗教文化懇話会発行 昭和五十年六月
佐田文蔵系譜については、拙稿「筑前仏師佐田文蔵について」（上・下）『西日本文化』九六・九七号 昭和四十八年十一月・十二月

法量 筑前怡土香力 東明山興福寺 十一面観音立像(単位 センチメートル)

〔本鉢〕

像高	一一・五	髪際下	九二・〇	頭頂—顎	三〇・〇
面幅	一〇・〇	面長	一一・〇	面奥	一四・二
耳張	一三・四	耳長	一〇・三(左)	一〇・一(右)	
肩張	二二・七	胸奥	一三・二(左)	一三・二(右)	
腹奥	一六・八	腰張	一九・五	腰奥	一四・一
肘張	三〇・一	裾張	二七・〇		
足開き	一八・四(外)		一一・三(内)		

〔持物〕

水瓶 長さ 九・二

〔光背〕

高さ 一二四・〇 柄長さ 八・〇

輪光径 三四・五(外) 一九・〇(内)

八葉蓮弁径 一七・五 蓮肉径 九・三

〔台座〕

高さ 二〇・七

上面左右 三八・〇 奥行 二八・五

底面左右 四三・〇 奥行 三〇・〇

〔厨子〕

高さ 一六六・〇 身部幅 六六・〇 奥行 四九・〇

(やひろ・いずみ 元太宰府市史編集委員会委員／元別府大学教授)

京仏師照暁作例年表（九州を中心に作成）

西暦	和暦	尊名	像高cm	所蔵	銘
1696 上旬5	元禄九年 五月 上旬	木造盧舎那仏修覆 光背新造	高155cm	戒壇院 福岡県 太宰府市 観世音寺	〔光背頭光八葉裏面銘文〕 「元禄丙子九年五月上旬戒壇上本尊古仏釈迦如来／新造／御光木地／京大宮通／タコ薬師上丁／ 仏師五兵衛／漆塗師／福岡城下／市右衛門／治右衛門」 〔一戒壇上古仏釈迦如来／并臺座／御長々五尺五寸／京仏師御幸町利兵衛中興智元宗陸再興／一三 具足智元代／一四間四面堂須弥座并前机／中興正洞律師建立／御光中興四世連照代／新造 立之／一後光／資財喜捨／二日市／大賀氏善四郎／一光佛三聖宰府古川氏／新三郎／一 同化佛三尊／宰府中村氏／又三郎／一同化佛一鉢吉塚氏／以心信士／一本地佛師／京大宮通タ コ薬師上丁／五兵衛／一塗師二人／福岡城下／市右衛門／次右衛門／元禄丙子歳／五月上旬〕 〔光背左端裏朱漆銘〕 「御光 元禄九年丙子七月戒壇院運建建立／二日市村大賀氏次兵衛／鳥妙印信菩提金六両喜捨／ 金薄并漆料」 ①
1698 4	元禄十一年 戊寅四月 上旬	木造聖観音立像 修覆	高155cm	永源寺 福岡県 北九州市	〔光背銘〕「再興本願 福岡城下寶子町商人 浦氏次良左衛門」 〔元禄十一年戊寅四月日／戒壇院僧慧燈記之置／佛工京大宮通六角上ル町／五兵衛〕 〔体内納入木札修理墨書銘一〕 〔表〕「一 筑之前州古屋之世宿永源禪寺之本尊／觀世音菩薩修復再興之施財主福岡城下／浦氏商人天王寺屋次良左衛門」 〔裏〕「唐土 安阿弥御作／太宰府戒壇院之住僧／慧燈記之置」 〔体内納入木札修理墨書銘2は小屋瀬大義山永源寺本尊聖観音菩薩を享和三年に佛工博多呉服町佐平修理の墨書銘札 省略〕
1699 10 から 1700 8 4	元禄十二 己卯年 十月 から 元禄十三 庚辰年 四月 八日	木造文殊菩薩立像 造立 木造弥勒菩薩立像 造立	高155cm 高143cm	戒壇院 福岡県 太宰府市 観世音寺	〔文殊台座反花部底部墨書銘文〕「元禄十二己卯年十月／木地／本尊於京師奉造佛工照暁／奉莊嚴事於戒壇院／塗師福岡住 弥兵衛／同 十右衛門」 〔元禄庚辰二月 日／金薄置師／福岡住 源兵衛／又四郎〕 〔文殊光背の支柱 陰刻銘文〕「文殊大士 元禄庚辰四月八日檀主氣雲道意居士 芝薺性實代」 〔弥勒台座内墨書銘文〕「弥勒菩薩／京仏工五兵衛／法名照暁作／奉莊嚴／福岡城下／職人町之住／塗師／十右衛門／弥兵衛 ／金薄置／同城下々々名嶋町／長左衛門／又四郎／源兵衛／本願施財主／嘉麻郡白井邑之／里長／氣 雲道意居士／行年八十二歳／助縁信男女若干／別記之置／戒壇院住僧／無覺／慈光／良仲／宗微 慈眼／春了／惠性／快音／行宗／義天／惠海／已上十一口」 〔弥勒台座反花部底部墨書銘文〕「文殊大士／弥勒太土／造立之／本願施主／嘉麻郡白井村／白井氏道意／元禄十三年／庚辰 四月／八日成就之也」 〔弥勒光背支柱 陰刻銘文〕「弥勒菩薩 元禄庚辰四月八日檀主氣雲道意居士惠燈性實代」 〔文殊・弥勒台座下 方形壇天板 墨書銘文〕「現監 無染真海／奉再建臺座／大工吉田吉太夫／親重／昔文化三丙寅年／ 佛生月上旬／塗師／野村傳平」 ②
1701	元禄十四	慈門信光像	高150cm	野中寺 大阪府羽曳野市	〔体部前面材銘〕「元禄十四年／巳春中御歳／七十八才年／奉うつし候／出来仕立／宝永四年／亥四月八日」 〔体部背面銘〕「京太宮通蛸薬師上ル／大仏師五兵衛／河内野々上野中寺／慈門和上」 ②
1702 2 1 21 日	元禄十五年 壬午歳 二月 二十一日	観音寺本尊光背修覆 延命地藏及び三具足 新調	高159cm	大悲庵 福岡県 嘉穂郡嘉穂町 大字貞月字前村	〔木造地藏菩薩野子裏陰刻銘〕 「筑前州嘉麻郡貞月邑観音寺本尊古佛連慶作／修覆座光新野子再興檀主村中男男女女若干村吏／ 森田氏康次郎代暫住律宗惠海寂湛近住勸化帳／本尊像中納之置 元禄十五年壬午歳二月二十一日／ 座像六寸二分延命地藏尊三具足調之也大仏工大宮六角照暁／右為後代信縁起焉惠海」

① 国宝修理所編・発行『重要文化財盧舎那仏坐像修理図解説書』昭和三十三年
② 元興寺文化財研究所編・発行『近世律師の肖像—その姿とところ—』平成二十年十月 関西大学 長谷洋一教授のご教示による。

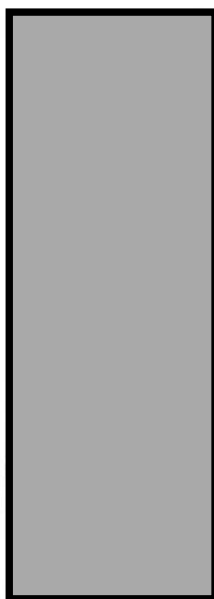
西暦	和暦	尊名	像高 cm	所蔵	銘文
1702 247	元禄十五年 七月 二十四日	聖福寺 木造地藏菩薩坐像 再興	高49.3	聖福寺 福岡県福岡市 博多区御供所町 (旧糸島郡一貴 山古寺之古仏)	(木造地藏菩薩坐像 体内背面墨書銘)「地藏王菩薩」 (同像 像体内腹部墨書銘)「〇〇元禄十一年戊寅正月/下旬宰府戒壇院芝薺/運照慧燈記文置/筑前國怡土郡一貴山 迦藍旧跡古寺/之古佛地藏王菩薩住持常照房/因願迎住 再興財主 慧燈」 (同像 像底陰刻銘)「地藏大士 行基正作 感得修復/筑前太宰府戒壇院 現住比丘運照/時元禄十五年/七月廿四日 /大佛工皇都/大宮六角住/大宮照曉」 (地藏蓮台墨書)「讃州小田浦地藏堂本尊筑前戒壇院芝薺運照寄付 元禄十五年壬午年九月二十四日謹記」
1702 249	元禄十五年 壬午九月 二十四日	木造地藏菩薩像		釜居谷地藏庵 香川県	(厨子裏墨書)「慈覺大師作 於京都修復再興座光新加 檀主三宅氏十助 化主筑前戒壇院運照慧燈開眼供養入仏 元禄十六年癸未七月十一日」 (仏師照曉の件不明) ③
1703 117	元禄十六 癸未 七月 十一日	木造地藏菩薩立像 修復開眼	高30	東末地藏堂 香川県	(体内納入木札墨書)「願主 寛〇 助主 了意 庄屋 正藏/〇持村中/京大宮通蛸薬師上ル町 大佛師照曉」 (体内納入木札墨書)「筑前太宰府觀世音寺 檀主 福岡萬町 松村宅兵衛 同室 同子喜兵衛 白木太兵衛 西嶋伊兵衛 青柳利兵衛 芝薺運照代 佛工京大宮住照曉」 (床座後屏陰刻銘)「筑前太宰府觀世音寺 戒壇院 鑑真律師 過海大師 橋口町 寶永二乙酉年六月六日 戒壇現住 佛工京大宮住照曉」 (光背陰刻)「筑前州三笠郡山家庄浦下村日輪寺地藏堂本尊/弘法大師作修復檀主小山田氏彌助」 [化主宰府戒壇院芝薺運照 大佛工京大宮六角住照曉/寶永二乙酉歲六月十四日] (古記写しや明治修復銘あり)
1703 665	宝永二 乙酉年 六月 六日	木造鑑真和上像 修復	高70.7	戒壇院 福岡県 太宰府市 觀世音寺	(体内背面修理墨書銘)「筑前州太宰府光明禪寺/方丈本尊釈迦心作/修復施財前住老僧知的禪師/佛工京大宮六角住住 照曉/化主戒壇院持比丘運照律師/宝永二乙酉年七月/九日小弟行宗記焉」 (光背陰刻)「檀主筑前州太宰府梅津/氏与市郎/仏工京大宮/六角住/照曉/宝永二乙酉年九月二日戒壇院/芝薺運照記焉」 (像底朱漆銘)「第三尊者 諸迦跋釐駄像」(他七軀は檀主名のみ異なる) [第三尊者 諸迦跋釐駄像/筑前州太宰府戒壇院南樓門/檀主讃州城下高松住頼田屋壽貞尼/戒壇現住芝運照惠燈代/ 宝永三丙戌仲春十五日/大佛工京大宮六角住照曉」 (修理朱漆銘文)「文政七甲申春再興之/京師高倉通五條上住/吉田源之丞」 (八軀とも檀主名が異なるが、いずれも讃州人にて、寒河郡津田補志度村・田面村・大内郡土井村・城下高松・志度浦・高松志度の人
1705 146	宝永二 乙酉年 六月 十四日	木造地藏菩薩立像 修復	高約18	山田家 福岡県 筑紫野市山家	
1705 97	宝永二 乙酉年 七月 九日	木造釈迦如来坐像 修復	高70.2	光明寺 福岡県 太宰府市	
1705 295	宝永一 乙酉年 九月 二日	木造阿彌陀如来坐像	高30.0	光明寺 福岡県 太宰府市	
1705 152	宝永三丙戌 仲春 十五日	木造十六羅漢像 八軀	高60.5	六萬寺 香川県 高松市牟礼町 (太宰府戒壇院 旧蔵)	

- ③ 平田弘泰編「志度町人物風景」志度町文化財保護協会発行 平成十四年三月「運上人」の項(岡村信男執筆)
④ 体内納入木札写真、寺報「大説山報」一八九号 平成十五年 円宗寺能登賢史(住職のご教示による。
⑤ 香川県立ミュージアム編「六萬寺 木造羅漢像調査概要報告書」平成二十一年一月(三好賢子編集・執筆)

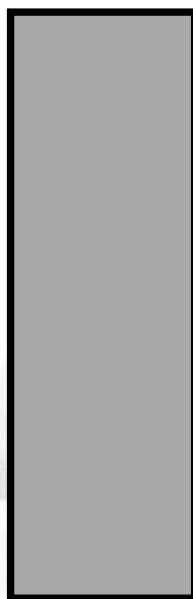
西曆	和曆	尊名	像高cm	所藏	銘	文
1706 25	宝永三年 丙戌二月二十五日	木造十一面觀音像 修理造立 光背造立	高105	大興善寺 佐賀県 基山町 (天満宮安樂寺 旧蔵)	〔光背背面陰刻〕「太宰府天源山安樂寺天満宮／本地本尊十一面大士 ^二 脇侍／不動毗沙門修復／本願天満宮宮司檢校 伝法大法師／大阿闍梨法印快風大徳／大佛工 京師大宮六角 照晚／化主 戒壇院必勤運照律師／ 檀主 姓名勸化牒 大乗妙典若干／本尊胎中納之 皆宝永三 ^三 丙戌年／二月廿五日 戒壇院小弟行宗記焉 惠照打刻之	
1707 27	宝永四年 丁亥二月二十七日	木造觀世音菩薩立像 入魂	高90	天神庵 香川県	〔厨子裏墨書〕「願主寒河郡小田浦長町助五郎 化主筑前太宰府戒壇院必勤運照 宝永四丁亥二月二十七日」	
1707 84	宝永四年 四月八日	木造慈門信光像	高97	野中寺 大阪府 羽曳野市	〔体部前面材銘〕「元禄十四年／巳春中御歳／七十八才年／奉うつし候／出来仕立／宝永四年／亥四月八日」 〔体部背面材銘〕「京太宮通蛸薬師上ル／大仏師五兵衛／河内野々上野中寺／慈門和上」	
1707 108	宝永四年 丁亥年十月八日	木造華師如來坐像の 薬壺を補作	高113 幅20	光明寺 福岡県太宰府市 (天満宮安樂寺 旧蔵)	〔薬壺胴部陰刻〕「修復主蔵／戒壇現住／苾芻運照／大佛工皇都／照晚／宝永四／丁亥年／十月八日」	
1709 3	宝永五年 戊子年三月吉祥日	木造普賢延命菩薩 坐像修覆	高124	神徳寺 大分県 宇佐市 安心院町	〔光背裏陰刻銘〕「表垣八幡宮御本地 豊前國宇佐郡安心院庄 日輪地蔵 修復施主龍王下町西島勘左 普賢延命菩薩 衛門并十方信男信女等財宝 不動明王 喜捨 各古佛 供影山神宮寺延命院座主寂 并佛具等 湛代 寶永五 ^五 壬子年三月吉祥日 京大佛工照晚」	
1710 61	宝永六己丑 年七庚寅正月六日	木造大日如來坐像 修覆	高95	武藤 真氏 福岡県 太宰府市坂本	〔底部墨書銘 其の一〕「太宰府坂本村□□□□堂／金大日如來 本尊／□□□□□□□□ 〔底部背書銘 其の二〕「宝永六己丑年□□月修復太宰／府戒壇運照／京佛工照晚／金 大日如來」 〔光背裏陰刻銘文〕「施主 坂本村武藤九良次／化主 運照／宝永庚寅正月六日／京佛工照晚」	
1712 28	正徳二年 八月二日	木造釈迦如來坐像 修覆	高96	興徳寺 福岡県 福岡市西区	〔台座蓮肉部裏銘〕「筑前早良郡姪浜邑／海晏山興徳禪寺／本尊釈迦如來／運慶作／移色是正母智淨比丘尼／ 台座御光新添石橋是正／爲 陰外了月信士 芳林妙菊信女 菩提／仏師京都六角照晚／化主戒壇院運照大比丘／ 正徳二年八月二日／六十八世徳翁宗達記」	

西暦	和暦	尊名	像高 cm	所蔵	銘文
1716 257	享保元年 丙申 七月二十五日	木造天神像	高350	水鏡天満宮 福岡県 福岡市中央区 (御笠郡通古賀 旧蔵)	〔台座裏墨書銘文〕 〔台座墨書遷座銘文〕 〔台座墨書〕 〔本体頭部内銘文〕 〔後部頭内墨書〕 〔面部・首部内墨書〕 〔木札銘〕 〔表〕 〔左木口〕 〔右木口〕 〔右木口〕 〔台形台座内面墨書銘文〕 〔向かって右〕 〔向かって左〕 〔前部〕 〔天板〕 〔後部〕 〔光背柄墨書〕 〔興福寺十一面觀音厨子側板墨書銘文〕 〔木札一枚の内享保分〕 〔表〕「享保三戊戌年 讃州大内郡与田虚空藏院現住／(梵字) 奉再興二王尊現當二世諸願皆悉圓滿所／六月吉祥日 大阿闍梨法印増乘持世七々歳也」 〔裏〕「増意上人御再興從元和九癸亥年享保三年迄成九十六年也／洛陽大宮通蛸薬師上ル町大佛師照曉造作之諸檀方以助力令造立者也本願主國方長左衛門良雄」
1717 112	享保二年 正月二月 (厨子)	木造十一面觀音立像	高1115	興福寺 福岡県 糸島市	〔本体頭部内銘文〕 〔後部頭内墨書〕 〔面部・首部内墨書〕 〔木札銘〕 〔表〕 〔左木口〕 〔右木口〕 〔右木口〕 〔台形台座内面墨書銘文〕 〔向かって右〕 〔向かって左〕 〔前部〕 〔天板〕 〔後部〕 〔光背柄墨書〕 〔興福寺十一面觀音厨子側板墨書銘文〕 〔木札一枚の内享保分〕 〔表〕「享保三戊戌年 讃州大内郡与田虚空藏院現住／(梵字) 奉再興二王尊現當二世諸願皆悉圓滿所／六月吉祥日 大阿闍梨法印増乘持世七々歳也」 〔裏〕「増意上人御再興從元和九癸亥年享保三年迄成九十六年也／洛陽大宮通蛸薬師上ル町大佛師照曉造作之諸檀方以助力令造立者也本願主國方長左衛門良雄」
1718 6	享保三年 六月 吉祥日	金剛力士像修復		与田寺 福岡県 志度市大内町	〔木札一枚の内享保分〕 〔表〕「享保三戊戌年 讃州大内郡与田虚空藏院現住／(梵字) 奉再興二王尊現當二世諸願皆悉圓滿所／六月吉祥日 大阿闍梨法印増乘持世七々歳也」 〔裏〕「増意上人御再興從元和九癸亥年享保三年迄成九十六年也／洛陽大宮通蛸薬師上ル町大佛師照曉造作之諸檀方以助力令造立者也本願主國方長左衛門良雄」

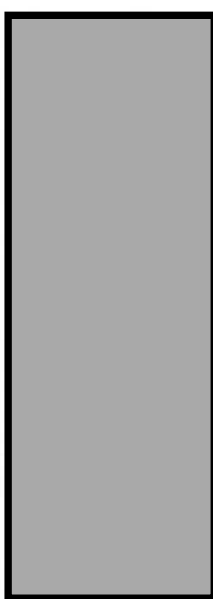
⑩九州国立博物館 楠井隆志氏の教示による。
⑪香川県教育委員会編・発行『与田寺調査』(平成七年 歴史博物館整備に伴う資料調査概報) 平成九年三月



△背面



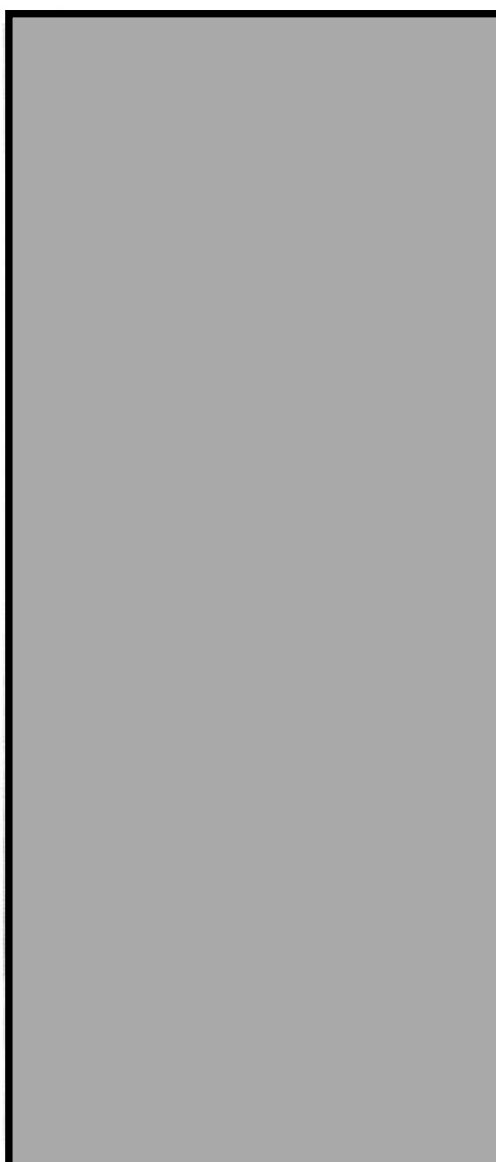
△右側面



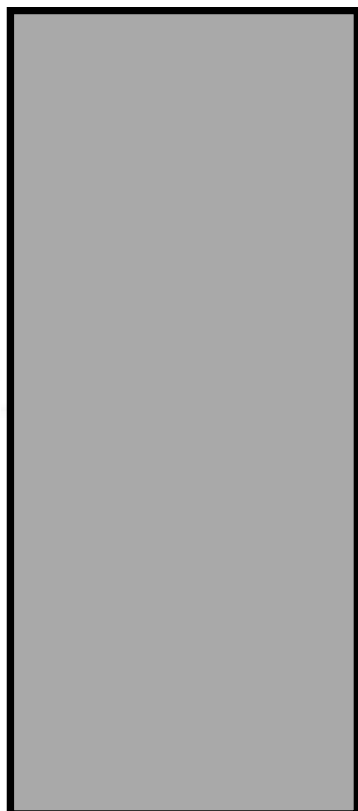
△左側面

□ 1 木造十一面観音立像
 <長谷寺式観音像>
 福岡県糸島市 興福寺

▷ 木造十一面観音立像



▽ 3 体内納入木札



▷ 2 体内納入の木札と巻紙二巻（右端）
 頭部内墨書（中央二面）及頭内納入包紙（左端）





△5 台座内墨書 前面内



△4 台座内墨書 左側面内



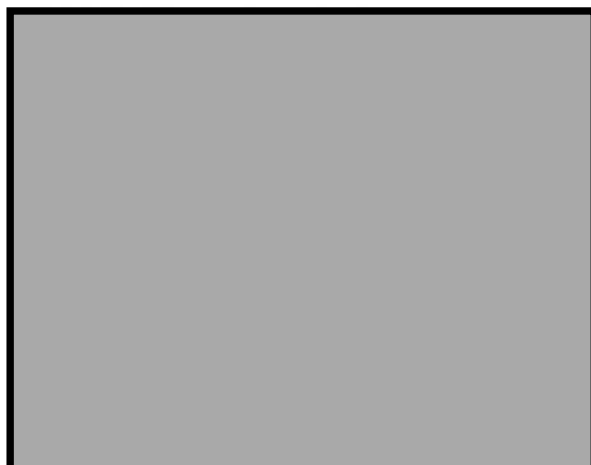
△7 台座内墨書 天板内



△6 台座内墨書 右側面内

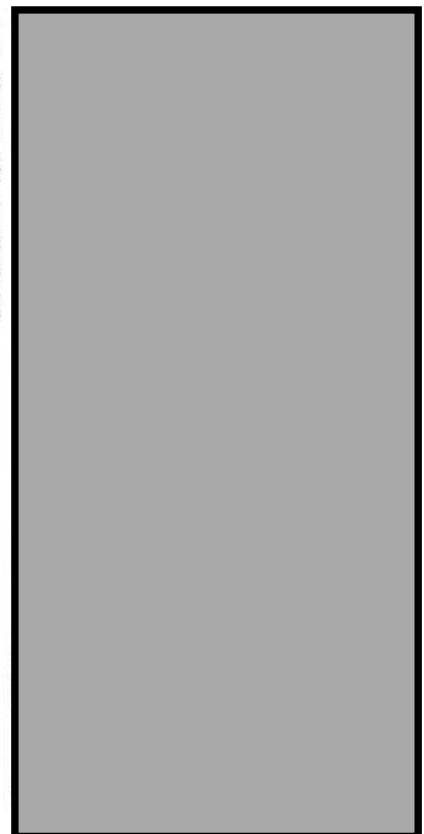


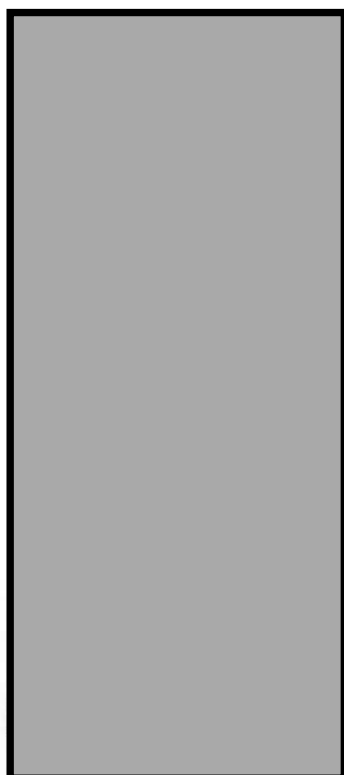
△8 台座内墨書 背部内



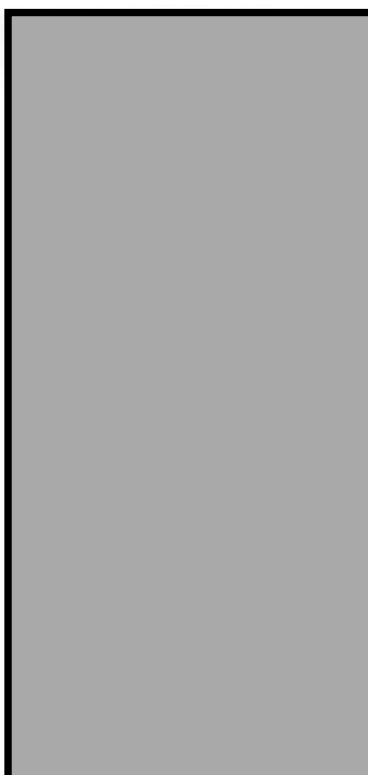
△10 頭部内墨書と包紙の納入状況

▷9 体内納入木札と巻紙二卷





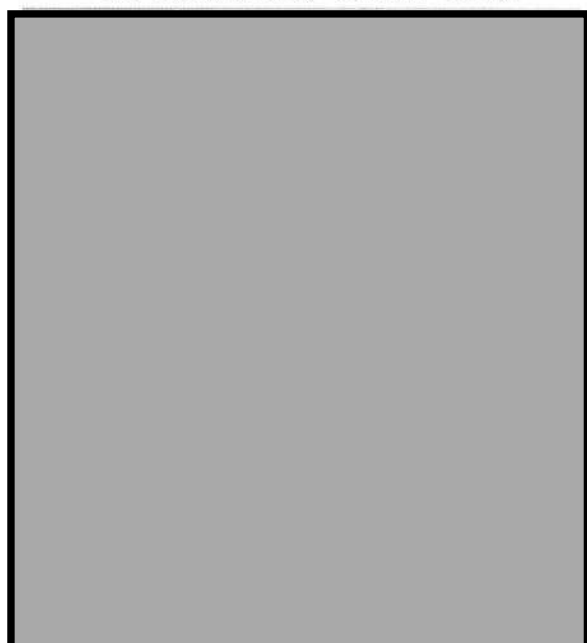
△13 木造渡唐天神立像
福岡市 水鏡天満宮
福岡市博物館写真提供



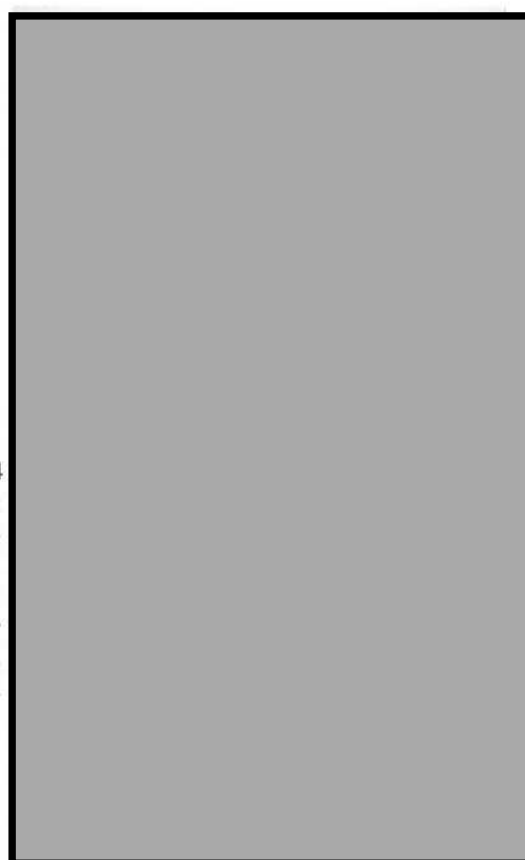
△12 木造弥勒菩薩立像
太宰府市 戒壇院



△11 木造文殊菩薩立像



▽15 木造鑑眞和上像 太宰府市 戒壇院

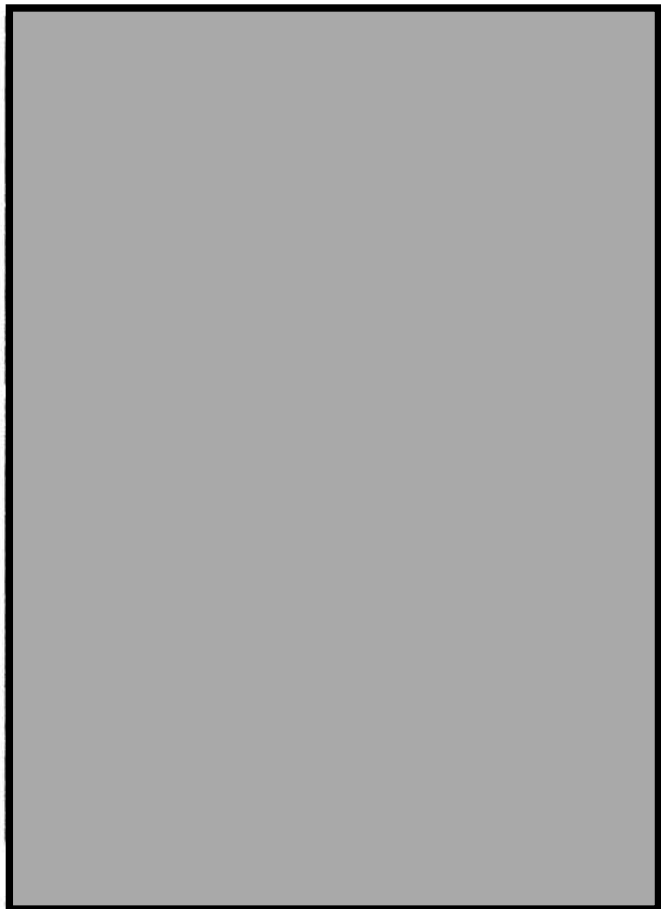


▷ 14 木造十一面観音坐像
佐賀県基山 大興善寺



△16 木造盧舎那仏坐像及び文殊・弥勒菩薩立像 太宰府市 戒壇院

17 興福寺山門と本堂
▷



▽18 運照慧燈和尚墓碑 糸島市 興福寺裏

